

上げられない。そこで一日中川につけっ放しにしておいたんですね。ところが、「西風ひよどり日いつばい」という諺があるとおり、日が落ちる頃になつて、風がバタッと止んだんですね。その時、祖父は、風で水が大分動いたんで、ゴミが網にひつかかっているんじゃないかと思つて、ロクロを巻いたそうです。ところが、ある程度網があがつてきたら、恐ろしく重くなつて、どうにも上げられない。それを時間をかけて、苦勞して上げていたところが、次第に網のへりが見え始めましてね。ところがそれから、重くて重くてどうしてもあがらない。それならそのうちに、ガボガボガボガボ、中いつばいの魚が見え始めて、何でもその時は、サイが三百本以上入つていたつて、こう言つていましたよ。今考えると、当時のサイは大きかつたんですよね。尺何寸というものばかりだつたんですからね。

サイが終わると鯉の季節です。鯉というのはそうむやみに採れるもんじやないですが、一日に五、六本は入りました。多い時は二十本以上入る時もありました。昔は大きいのが居りましたね、私の祖父の記録には、四、五、

百というのがあります。今ならナイロン糸なんかがありますから釣ることもできるでしょうが、昔のように秋田糸とか、そんなものしかない時代ですから、釣り竿じやとつても釣れなかつたでしょうね。私の親父のとつたのは三貫八百というのが一番大きかつたそうです。私にはそんなのはとつたことはないんですが、二貫台のものは何本もとりました。もつともそんな鯉はみんな雌で、卵をいつばいもつていました。卵の重さも相当あつたんですね。

「すくい網」

これはこの地方の方言で、カックイと言つた漁法です。宮内庁で鴨の御猟に使う網がありますね。あれを大型にしたもので、逆さにして水の中に入れ、魚をすくうんです。川が上流から流れてきましよう、それならその上流に網を入れ、網を袋のようにふくらませ、静かにスーとすくうんです。すると、魚というのは、水に逆らつて

上る習性があるでしょう。水が強く流れれば流れる程、魚は勢よく逆の浮るわけですよ。だから大雨が降つたりした時は一喜一憂のわけですよ。それには前が